

自分たちにできること

村上市立朝日中学校 3年 中山 こはる

私が入っている美術部は大きな大会が無い。だから私たちは郡市、下越大会がある日は、大人しく学校にいるしかない。そこで自分たちにできることは無いかと考えたとき、選手たちが疲れて学校に帰ってきて、玄関に入ってきたときに、元気が出るような飾りつけをしようとなった。私たちは実際に大会に応援に行くことはできない。けれども少しでも選手を応援したい気持ちから飾りつけをしようと思った。そして郡市大会、下越大会と美術部の三年生みんなで飾りつけをしてきた。特に下越大会は頑張った。郡市は初めてで時間が無く、あたふたしていたが、下越は時間があったため、余裕を持って作れた。おかげで納得のいくものが作れた。

頑張って作ったおかげか、選手たちに、
「ありがとう。すごかったね。」
と言ってもらえた。とても嬉しかった。

その時に言われて気付いたことがある。それは、ただの「頑張れ」という気持ちの飾りつけではなくて、私たちの心がこもっている飾りつけじゃなければいけないんだという事だ。

私自身も、心のこもった応援をもらったことがある。私は小学生の頃、バレーボールをしていた。今でも覚えていることがたくさんある。大会で強いチームと当たると、以前までは大差をつけられて負けていたけれど、ある大会で相手を追いつめて、僅差で試合を終えられたこと。六年生のときの大会で準優勝できたこと。しかし、六年生最後の試合はあっけなく終わってしまったこと。私は苦しいこと、悔しいことをチームメイトと一緒にたくさん乗り越えてきた。そんな時、家族や友達、監督に、
「おつかれ様、頑張ったね。」
という心がこもった言葉を言ってもらえて気分がよかった。

バレーボールの大会では負けて悔しかった。勝ったけれど、疲れた。疲れていたから励ましてもらえると、私は心が癒された。

緊張、感激、嬉しい、悔しい、苦しいということを経験できたから、こういう感情を中学校の大会で味わっている選手たちに伝えたかった。何もしないでいるより、何かを伝えたくなった。だから今、自分たちができることをやろうと思えた。

もし、私たちが何もしなくて、飾りつけを作っていなかったら、学校に戻ってきた選手たちが、

「つかれたー」

とか

「勝てた！」

もしくは、

「負けてしまった…。」

で終わってしまう。でも、飾りつけをしていたら、

「あ、飾りつけされてる。すごーい。」

と少しでも思ってくれる人がいると思うし、そう思ってくれる人がいてくれたんだと思うと、作った私たちもとても嬉しいから、今思うと、やはり作ってよかったと思う。さらに、飾りを作ったおかげで、朝日中学校のすべての部活が一つになった感じがした。

完成品を廊下に飾ったら、選手たちにも喜んでもらえたが、先生方にも嬉しい言葉をたくさんもらった。実際、大会に行った先生方にも、

「ありがとう」

と言っていて、頑張って作った甲斐があったなと思えた。

下越大会のときの飾りつけをみんなが喜んでくれたから、現在制作中の県大会の飾りつけも、みんなが喜んでくれるような物を作っていきたいと思うようになった。私たち美術部は、これくらいしかできることはないけど、帰ってきた選手たちに心の底から、

「おかえりなさい、おつかれ様。」

ということを飾りつけを通して伝えたい。そしてこれを後輩が受け継ぎ、もっとすごいものを作ってもらって、選手たちを元気付かせて行ってほしい。